

平成二十年度平和事業平和祈念講演会・平和を願って

〈私の被爆体験〉

日時：二〇〇八年八月二日（土）一三時三〇分～一四時三〇分

講演者：池田 いけだ 精子氏 せいこ

ただいまご紹介いただきました、池田精子と申します。

本日、この席に、平和の願いとということでお呼びいただきお世話くださった方に心から御礼申し上げます。

私は、「被爆地」ヒロシマ「平和都市」、「人間が犯した過ち」、「戦争の悲惨さ」、「人類の滅亡につながる核兵器」が一日でも早くこの地球上からなくなること願って本日、この和光市にやってみいりました。

それは六十三年も前の事なんです。一九四五年八月六日、人類初めての原子爆弾が投下されました。その日は朝から、太陽が照りつけ、燃えるような一日を予感させました。

午前八時十五分、悪魔の兵器はヒロシマの上空六百メートルのところで炸裂いたしました。それは南太平洋にあるテニアン島というところにあるアメリカの基地から六時間半かかって、「エノラゲイ」号と言う飛行機がB29ですね。「リトルボーイ」と言う爆弾をかかえてきたんです。

その時、学徒動員として建物疎開家屋の後片付け、どういうことか

と申しますと、もう百都市以上も全国で空爆を受けておりました。ヒロシマとナガサキはなぜか無傷のまま一度も空爆をうけてなかったんです。何故でしょうか？大きな都市の戦災を参考にいたしました、ヒロシマは城下町で、道幅が狭いので、大きな広場を作るために、火災が発生したら、そこで火が食い止められるように、またみんな人間が逃げる場所ですね。それを作るために人間を疎開させて大人の人家が家を壊して、広場を作っていたんですね。その後片付けの作業を、壊された後片付けを中学一年生二年生、女学校の低学年がしておりました。ですから、その学徒動員にもその威力をいやというほど、みせつけられました。

さて、当時のヒロシマには三十五万人の人が住んでおりました。その八月六日、一日だけで五万とも六万ともいう方が亡くなったわけです。十二月までの五ヶ月の間に十五万とも十六万ともいわれる方が亡くなったんです。いままって、正確な数はわかりません。そのうちに軍人はたったの二万人であつたわけです。大体戦争の場合には、軍事基地や軍事施設が攻撃されます。でも、そうではありませんでした。当時のアメリカのトルーマン大統領は街の中心部、人口の密集している場所に投下しろという指令を出したんです。ですから、もう一般市民も無差別に攻撃されたわけですね。

犠牲者は日本人だけではありません。あの当時、政府の植民地支配政策というのがありまして、朝鮮半島の方から強制連行して、強制労働させていた人たち、そして、アメリカの捕虜もいたわけです。中国

や東南アジアから留学生、勉強に来ていた生徒たちもいたわけですね。そういう外国人も含まれておりまして、大体二万人くらいはいたんじゃないかと予想されております。で、戦争に勝つためには都市を破壊し尽くし、そして、武器を持たない一般市民も完膚なきまでに殺傷すること、これが正当化されておりました。生き残った市民も家を失い、傷つき、肉親を失い、瀕死の状態であったわけです。これは無差別に非戦闘員を含む大量殺人だったのです。

この「リトルボーイ」と呼ばれたわずか4トンの原爆につめられたウラン235、たとえば、「大阪」「東京」大きな都市に落とされた通常爆弾に使われている爆撃機四千機分以上のエネルギーを放出したという。たった1キロ弱、わずかですね。鶏の卵に換算して、十五個分ですから、わずかこれだけの量です。けれどもそれが、爆撃機四千機分と同じだけのエネルギーを放出したということです。

原爆には特異性が3つあります。「熱戦」と「爆風」、そして「放射線」というのがあります。この「放射線」というのは、核兵器にしかないわけですね。ふつうの爆弾と核兵器の違いは、もう、普通の爆弾は、普通の爆弾は地面に落ちて炸裂いたします。けれども、核兵器、原子爆弾は空中で炸裂するんです。ですから、通常の爆弾であれば、少し離れたところであれば、助かることもできる。逃げることもできるわけです。しかし、空中で炸裂した場合は、一瞬にして、あつという間です。逃げることもできないわけですね。

原爆には普通の爆弾と違って特異性が3つあるんです。「熱線」、「爆

風」、「放射線」この放射線というのは核兵器にしかないわけですね。ど

の一つだけとっても、熱線だけとっても、爆風だけとっても、放射線だけとっても、本当に恐ろしい。この熱線と爆風と放射線の3つの要素が複雑に入り混じって、「複合作用」といって、大きな被害になったわけです。

まず、「熱線」です。爆発の瞬間に数百万度という熱を持った火球が、二百メートルも三百メートルもあるような火球、火の玉が、天に舞い上がりました。その地上で、みんなが歩くところ、地上の温度は三千度も四千度もあったと言われております。鉄が溶ける温度、溶鉱炉の中で溶ける温度が、千五百三十度です。ガラスやビンがどろどろになって固まる、という温度が七百度か八百度ですから、その時の温度よりはるかに強いものであったということがわかります。そうした熱線によって、一瞬のうちに、人の体が焼かれ、街が焼かれ、衣服が焼かれ、爆心地あたりにいた人たちは骨も灰もなくなり、蒸発したという一説もございます。

次に「爆風」ですけれども、爆心地からおよそ二十七キロメートルの所にまで、被害が及びました。それで、爆発した瞬間に数十万気圧という圧力を持った衝撃波が四方に広がっていった、その後、吹き抜けてくる風、これを「爆風」というんですね。その「爆風」の最大瞬間風速は四四〇メートルにも達したということです。今戦後六十三年たちましたけれども、日本に上陸してきた台風で一番大きなもので一九六六年九月に沖縄に上陸してきた台風は、最大瞬間風速85.3メ

ートルといわれておりますから、もう、それ以上の台風はまだ来ておりません。今頃、6号とか7号とか言われる台風でさえも、風速十八メートルとか、二十メートル、三十メートル、五十メートルになったら、もう暴風ですね。それが四四〇メートルにも達したということですから、爆風によって、人が倒され、電車やバスはもちろんふき飛ばされ、大きな被害になりますと、ビル全体が破壊される。そして、木造家屋も、なぎ倒しです。人間の眼球が飛び出す。目の玉が飛び出す。おなかが破れて、内臓が飛び出す。こういう状態もあつたということですね。

それから、「放射線」、これが核兵器にしかありません。今も天然放射線というのはふつております。しかし、人体に影響のない天然放射線というのは、1ミリグレイといわれておりますけれど、ヒロシマの場合、爆心地から百メートル二百メートルくらいのところではその十五万倍、一四七グレイの放射線を受けたといわれております。

こうした「熱線」、「爆風」、「放射線」の複合作用によって、原爆の被害は想像を絶するものとなつたわけです。

この、人類史上未曾有の惨劇の情景は、まあ皆さん、ヒロシマにいらつちやつた方もあるかも存じません。あの資料館の中、私たちは見て、いつも、きれいなんですね。あんなんじゃないなかつた。どんな文豪、どんな画家の神業をもつてしても、表現しうるものではないと思いません。私たち直接原爆を受けたものも、あのひどい凄惨な光景を見た人もそれは同じです。全て、部分的なことなのであり、全部を伝えるこ

とはできないわけです。

こうした無差別の爆撃は、論理やルールのかけらも存在しえなかつた。残虐非道というしかありません。

あれから、六十三年の歳月が流れてまいりました。しかし、被爆者にとりまして、六十三年前のあの惨禍は今朝の明け方の夢よりも、鮮やかに思い出されます。それは、いつ訪れるともわからない死の恐怖と戦っているわけです。

私が被爆いたしましたのは、爆心地から1.5キロ、1.5キロこのあたりでした。(地図を指差す)建物家屋の後片付けに従事しておりました。その日は女学校一年生二年生の低学年が八二〇〇人借り出されていた。みんないるんな学校から出ておりましたけれども、もう、一瞬のできごとです。あの朝は、警戒警報も空襲警報も解除になつておりました。ですから、一般市民も学徒たちも作業についたばかりだったんです。

なぜかね、東の方から、白い飛行雲を引いたB29、戦闘機がやつてくる。「なんだろう？偵察機かな？」つて指差しているのを見た時です。その時です。ピカッつと、ものすごい、稲妻の何千倍、何万倍、そんなものじゃない、ものすごい閃光ですね。あとを追うようにどくんと爆風の音とともに、目の前が真っ暗闇になりました。その爆風で十五メートルくらい、吹き飛ばされてしまいました。私は気を失つてしまつたんです。しばらく何にもわからない。やっと我に返つたんです。そしたら、髪はちぢれ、薄暗く、もうもうと黒い煙が立ち込

めている。友達を見ると、髪の毛が縮れて、ぼうぼうに逆立って灰をかぶっている。着ていた衣服はもう、ぼろぼろに焼けつけていて、所々に残っているわけです。真っ赤な血まみれの大火傷ですね。赤身も剥き出しになっていました。恥ずかしいって肌を隠す、そういう気持ちも失っているんです。そして、助けを求めて逃げていきました。満身に火傷を負いながら、泣き喚きながら、みんなとおんなじ方向について逃げていった。それは、生きた幽霊の行列のようでした。道端にはたくさんのが人が、黒焦げの人たちが横たわっているわけです。そういう人たちをまたげたり、よけたりしながら、逃げていった。そして、首と胴体がばらばらになっている人もいました。

はじめのうちは、「あゝ、かわいそうに、気の毒だな。この方も助からなかった。あゝ、死んでいる。かわいそうに。」人間としても温かい感情でみているんですけど、たくさんさんの死体を見ていくと「あつ、ここにもあるよ。あそこにも、」だんだんそんな人間としての温かい感情がなくなってくるんです。それは私だけではなかったと思います。

そして、もう熱くて熱くて、痛くて痛くてたまらないんです。ヒロシマには七つの川があります。水の都と言われております。大田川の下流が、この青い線が（地図を指し示しながら）、川なんです。八時ごろ満潮だったんです。みんな川に入っていくんですね。求めていくわけ。途中逃げているときも「水をください。水をください。」ってみんな手を差し伸べている。「水飲んだら、ショック死するから飲ま

すな！」ってみんな言っているわけです。「死んでもいいから、水飲ましてください。」そして、もう、泳げる人も泳げない人も幼稚園くらいの子どもたちまでも、ざぶんざぶん川に入っていくんです。みんな川へ、あの冷たい川の水は焼けてちりちりと熱い体には宝でした。みんながばがば水を飲んでるんです。重症の人の中はその水を飲んだら、もう沈んで浮いてこない人もいます。私はその水は汚かったから、気持ちが悪いから飲まなかったんです。それがよかつたんだと思います。

そして、私は川から這い上がって、友達と一緒に逃げていたもんですから、友達の顔をよく見ると、もう顔がこんなに腫れ上がっているんです。皮膚が破れ、蟻をたらしたようにぶら下がっているんです。もう、きつと私もそんなになっていたはずです。

そして、私たちは当時、「原爆」「原子爆弾」ということがわからなかったものですから、私たちが作業しているところを狙われたと思っただけですね。そこに爆弾が落ちたと思っただけなんです。

そして、私は、それまでは友達と集団で逃げていたんですけど、だんだんもう、うちに帰りたい。家族が恋しいわけなんです。お父さんお母さんに会いたい。その一心です。ですから、わたしは、先生や友達の列から外れました。一人で行動したんです。

帰りたい…。私は、うちは市内ではなかったんですね。二十キロあまりの瀬野というところでした。東のほう。どっち向いていいかわからなかった。今はたくさんビルが建ち並んでますけれど、当時は木造

家屋がほとんどでしたので、焼け跡の写真を、もしご覧になることがありましたら、ほんとうに、ビルはぼつん、ぼつんとしか建っていない。木造家屋は、べっしやんこですから、逃げる途中に、家の中から「助けてくれ」。「はよ出してくれ」。「子どもたちも生きとるんじや」こっちのほうからも「助けてください。」「出してください。」「あっちからもこっちからも家の中から助けを求める声が出ているんです。8時ごろですね、食事のあと、まだ家にいた人もいるわけですね。私は当時もう十二歳、八月十五日が誕生日ですから、すぐ、十三にはなつたわけですけど、もうどうしていいかわからない、自分も大怪我をしていて、逃げるので精一杯なんです。どうしてあげていいかわからない。耳をふさいで、「ごめんね、ごめんね」と逃げるしか方法がなかったんです。

そして、私は東のほう、もうどつちを向いて逃げたらいいかわからない。ここに(地図を指しながら)小高い比治山というのがあります。街の真ん中に低いきれいな山があるんです。こちらから、この山にみんな逃げていくわけですね。そしてもう、山の頂上から市内をみおろすと、もう、2、3時間も経っていたでしょうか？新聞紙を丸めてマツチで火をつけたように煙があがっている、小さなボヤがあがっている。こっちからもあつちからも。あの高い熱線によって、自然発火で火災が発生しました。その火はたちまち、全市を火の海で取り巻いたんです。この赤い部分ですね(指し示しながら)ここからここが2キロです。4キロ、4キロ四方が一晩中燃え続け、3日位くすぶり続け

たということなんです。ですから、私が逃げる途中に家の下敷きになって「助けてくれ、はよここから出してくれ」といった人たちも誰も助けてくれる人はありませんでした。襲い掛かる煙にむせびながら、じりじりと焦がす炎でみんな焼き殺されてしまったんです。

川で溺れて、「お母さん、お母さんを助けて」と叫んでいた人たちも誰も助けてくれる人はいませんでした。

そして、私はこの反対側の(指し示しながら)こっち側の段原というところ、こっちから上がってこっち側に降りました。この辺は、家は倒れておりましたけれど、火の手がまわらなかつたところなんです。ずつと家は倒れて、道がふさがっていたので、四つん這いになってやつと国道まで出ました。国道まで出るとたくさんの学徒達が逃げ回っているんです。みんな裸の状態です、血まみれで、そこへ通りかかったおばさんが「女学生さんが裸でかわいそうに」そういつて、壊れた家のカーテンを引き裂いて、私の腰に巻いてくださいました。

そこへ1台の軍用トラックが来たんです。海田^{かいだ}方面に帰ると言うんです。海田というのはヒロシマから十二キロくらい離れたところなんです。ここに海田町って書いてあります。私は海田町からさらに十キロくらい離れた瀬野というところですから、半分までは帰れるわけです。私はトラックにすがりつきました。そして、助手席から兵隊さんが降りてきて、「若い男性のけが人をよつて乗せていくんです。年寄りや助からないかもしれない人はもう。」私は「学徒動員で勤労作業して

たんです。」とお願いして、やつと乗せてもらいました。そして、この海田町の病院に運ばれたんです。

病院に着いたら、たくさんのけが人が運び込まれていて、廊下も診察室も満員です。入りきれないで、庭にむしろがずらっと引かれて、魚市場の魚のように、寝かされ転がされていました。

そして、薬と言ってもたくさんのけが人です。薬はすぐになくなります。だから、食用油をズルズル塗るだけの治療です。当時、国防婦人会の人たちがたくさん駆けつけてくださいました。家にある浴衣の古着や、下着をたくさん持ち寄ってくれた。

そして、肉にくっついていてる制服をはさみで切って、はぎ取るんです。腕がすわけですね。火傷にびったりくっついていてるんです。それを剥ぎ取られるのは、生の皮をいっしょに剥ぎ取られるような痛さでした。でも我慢して、そのあと、べたべたべたべたと食用油が塗られ、そして、衣服を着せられて、治療が終わって、奥のほうに寝かされたんです。私は気持ちが悪んだのか、うとうととしておりました。気がついたときはもう目が腫れて、顔が腫れ上がって目が見えないんです。口も少ししかあけられない状態だったんですね。で、昼間は危ないと言うので、昼間はまだ、飛行機が旋回していました。そのあとの写真を撮ったりの調査があったのだと思うんですけど、昼間は危ないというんで夜になって、父が近所の人と大八車にお布団を積んで迎えに来てくれました。迎えに来てくれても、わが子がどの子かわからないんです。顔がぐちゃぐちゃです。もうまっ黒のぐちゃぐちゃなんです。

す。見分けがつかない、我が子の見分けがつかないんです。父は困って、「精子、お父さん迎えに来たよ」って、「お父さんが迎えに来たんだよ」とそういって、一人ずつに声をかけて歩きました。わたしは、うとうととしていたんですが、父の呼ぶ声に気がつきました。思わず、「お父さん」泣きついたんです。その声で私は見分けてもらいました。

そして、夜の道をことごとくことごとく、我が家へ帰ったんですけれど。翌日が大変な苦しみですね。もう薬がない、お金を持って薬局に言つて薬をと言う状態じゃないんです。

戦争が激しくなったら、薬もない。着る物もない。食べるものもないんです。

そして、母がいざと言うときにと、大事なものを隠しているわけですね。その大事なものを持って、お医者さんの裏口から行くわけです。往診で、来てくれない。村に大勢のけが人が運び込まれて手が回らない。ですから、家庭療法するしか手立てがなかったわけです。「先生、助けてください。娘を助けてください。高熱にうかされて、うわごとのように痛いよ、痛いよと泣き続けております。生死の境を彷徨っておるんです。」やつと、白い粉の亜鉛華というの薬を手に入れました。それを、ひまし油で溶いて、ガーゼにべたべた



塗って、傷口にべたべた貼り付けるんです。でも、あの放射線の中には恐ろしい毒があったんですね。もう、血小板まで壊してしまうような恐ろしいものです。ですから、化膿してしまうわけです。一日2回くらいそのガーゼの交換をしなくてはいけないんですね。そして、父が私を押しえつけて、叱りながら交換するんです。それは、やっぱり、生の皮を引き裂かれるような痛さだったんです。そして、もう、熱にかされて、一日中「いたいよ、いたいよ」と、うわごとのように泣いていたそうです。

その様子を見て近所の人たちは「あれで生きられたら、奇跡だ」村に運ばれた人が人もばたばた死んで行きます。「今度は精子ちゃんの番よ」「もうすぐ、死が近いよ」みんな決め付けているんですね。「明日まで持てばいいが、今晚がやまかもしれないよ」もう、お葬式の準備までしてるんです。

そんな3日目です。小学校の時、同級生でおんなじクラスだった沖末チエさんっていうのがね、元気で無傷で帰ってきたんです。家族の人たちは大喜びです。チエちゃんはけがもしてない、元気に帰ってきたってみんな大喜びです。「女の子が顔なんか大火傷したら、火傷の傷はいえても、醜い傷跡やケロイド、ひきつれは残る、生きてても不幸、死んだほうが幸せかも知れんよ。チエちゃんは、運がよかった」とみんな、大喜びしたんです。それでも、父も母もあきらめませんでした。大事なものがお米にかわって帰り、新鮮な野菜にかわって帰るんです。ことごと炊いたおかゆを一生懸命口の中に流し込むんで

す。もう死ぬと言われていた私が、十日、二十日、一ヶ月生きただす。熱は下がってきました。座れるようにもなったんです。

そんな時、元気で帰ってきたチエちゃんが体の不調を訴えて、床につくようになりました。朝、髪をすくと、櫛にくっついて、ぐさつと抜けるんです。たちまち、頭は丸坊主になりました。胸からおなかにかけてはパンパンに張っているんです。体中に紫色の斑点も出だしました。鼻からも口からも耳からも血が吹き出るようになったんです。

一ヶ月もすると村に運ばれた人が人はほとんど亡くなりました。やっとお医者さんが往診にきてくださるようになったんです。往診に来てくださった先生にチエちゃん、手をあわせて拝むんです。「先生、助けてください。私は死にたくない。大人になるまで生きたい。やりたいことがあるんです。先生助けてください。」「お母さん、私はなんにも悪いことをしていないの。なんでばちがあつたのかね。死にたくないよ。死にとうないよ。やりたいことがいっぱいあるんだから。」でも、チエちゃん、とうとう亡くなりました。

彼女は3日も、怪我していないのでヒロシマに残って救護の手伝いをしたわけです。「残留放射能」土や空気や水に含まれてる放射能、たつくさんあつたわけですね。

わたしは大怪我していたんですけども、早く自力で逃げて、運よくトラックで拾われて、その日のうちにヒロシマ市内から出てきたわけですね。彼女は「急性放射能症状」、とうとう亡くなりました。

そして、3ヶ月くらい経つと、もうね、歩けるようになったんです。8月6日から暑い間ずっと家にいて、出られなかった。外に出たい。子どもたちが遊んでいるところに行くんです。そうすると、「赤鬼が来た、おぼけみたいだ」ってささやくんです。私は泣いてうちに帰りました。母はそんな私を抱きしめて、「こんな顔に誰がしてくれたんね！」って泣くんです。

もうその頃、自分の顔に変化が起きているってことは、顔を触ってみて、わかっていたんですけど、鏡をみようとしても、家族が鏡を隠しているんです。家中大探しして、やっと、引き出しの奥のほうに小さな鏡、見つけました。その鏡の中、初めて鏡をみて、わたしは天地が砕けんばかりに驚きました。生まれてこの方、見たこともないような形相になっているんです。レバーをはったように赤黒く、ケロイドがななめに盛り上がり、あごが首にくっついている、左の唇はめくれあがっている。我が目を疑うばかりです。

その日から私の苦しみは肉体的苦痛から今度は精神的苦痛に変わってきました。

被爆後、8ヶ月位すると歩けるようになり、元気になりました。私はずっと、列車通学だったんです。視線が気になる。今のように入アがピシヤツと閉まるのではなくて、列車のドアはあけっぱなしで、おしくら饅頭のように押されて押されてやっと列車に乗るような感じだったんです。ですから、人目が気になる。あまり近づくと、みんな顔を背ける。もう列車が耐えられなくなったんです。誰を恨んでどこ

を訴えていいかわからないわけです。私たちは八月十五日、終戦の日。その日まで「日本は神の国である。絶対に戦争に負けないんだ。いざと言うときは神風が吹いて敵を滅ぼすんだ！」と学んでいたわけです。小学校入った時はまだ戦争は始まっておりませんでした。子どもたちは何にもわからないままに戦争がはじまったんですね。一年生の国語の教科書、「さいた さいた さくらがさいた」というかわい文章も段々「すすめ すすめ へいたい すすめ てっぽうかついでとてちてた」と文章まで変わってきたわけです。

そして、兵隊さんは戦地でご苦労してらっしゃるんだから、私たちは子どもであっても女であっても年寄りであっても、あたしたちが銃後を守るんだと愛国心に燃えて一生懸命頑張っていたわけです。

私は方向を見失ったわけです。朝、母が弁当を作ってくれて、学校に行くような顔を出るんですけど、学校に行かないでさぼる。勉強はどんどんどんどんわからなくなってくる。母にも父にもつつぽってつつぽって、悪い子になってしまふ。チエちゃんみたいに死ねばよかった、なんで看病してくれたのかって。もう、自分がどうしようもなくひねくれてくるわけです。

そして、とうとう死を考えるようになりました。

で、そんなある日、外から帰ってきたんですね。学校に行っていないから表の玄関から堂々と入れませんから、裏口からこっそり帰るんです。そしたら、裏の縁側で隣のおじいさんと父が話をしているんです。私はまたね、なんか私の悪口でも言っているんだらうと思つて物陰に

隠れるわけです。やっぱり私のことを話しているんです。

「チエちゃん、かわいそうに死んで、さぞかし死にとうなかったろうに。精子は運がよかった、生き運があった。」いうて、「顔に大きな傷が残ったけど、死んでもうちゃ、なんにもならん。生きてさえすりゃ何でもできる、人間の命は尊い。美しい。地球よりも重い。大切なんだ。精子は運がよかった。運がよかった。」って父は喜んでい

るんです。そして、「あの子なら頑張って立ち直って生き抜くに違いない。」無茶苦茶になってぐれている私を信じてくれているんです。

そして、当時はまだ8月6日から15日まで頻繁に空からビラがまかれ無条件降伏しろというような空襲がありました。ですから、昼間は家族みんな家にいるんですけども、夜は、母は、年取った祖母と、妹、弟、妹を連れて山小屋に布団とかいまきを持っていつて疎開するんです。家には父と私だけが残るんです。私はズルズルの体で動かすことができない。その時に夕食といたら、大きなお鍋に米一握りに野菜、水をいっぱい入れた雑炊です。灯火管制ですから、雨戸は閉め切ってます。扇風機なんて贅沢なものはない。お国のために金のつくものはみんな供出しなさい。正直な人はみんな供出しました。鉄砲の弾になるんだ、飛行機の部品になるんだと、ですから、贅沢な冷房は団扇くらいですね。汗たらたら流しながら、その雑炊をみんなで食べ、山へ出かけるんですね。その時、母は、「おとうさん、精子お願

いってお願いします。「ああ、わかった。精子はわたしが守るから、心配するな。連れて逃げるから、はよいけ、はよいけ。はよせんとまた空襲警報が鳴るから。」そういつて送り出していた。その時のことを言ってるんです。

「精子を空襲になったら、爆撃されたら、連れて逃げてくれと言っただけでも、体はズルズルで、抱いて逃げることも負うて逃げることもできやせん。かといつて、あの子一人だけ残して私一人だけじゃよう逃げん。もう逃げまい。なにがあつても逃げまい。精子の傍でともに一緒に死のうと覚悟を決めておったんだ。」と、父が言っているんです。

私は物陰でそおつと聞いているわけですね。あゝつ、やっぱり頑張つて生きていかなきゃいけないなあ、とそう思うようになったんです。その日から、私は、もう、父や母を責めることをやめました。そして、まじめに学校に行くようになったんです。先生もやさしく、遅れたところを教えてくださった。

それから、前に向かって、上を向いて、前に進むことだけを考えたんです。父母の愛に支えられて、私は生きる勇氣の道を選びました。青春時代の苦痛はどんな文字や言葉でも表現できません。

母は私が娘になるに連なつて、私とおんなじように苦しんだんです。なんとか美しくなるものなら、元に戻るものなら、と、何度も（整形）手術させてくれるわけですね。

はじめのうちはまだ、ケロイド体質で足の皮もくつつきませんでした

たけど、ずつとのちになって手術した昭和三〇年ごろ、ノーマン・カ
ズンズさんというアメリカの議員の人が、原爆乙女二十五人をアメリ
カに連れて行って治療して下さったんですね、その時にヒロシマの
「ハナダドウミン」先生という外科医の先生と一緒に付いてもらわれ
て、お手伝いされた。その先生がお帰りになって、私と偶然会って、
「池田さん、手術してみないか？」って。「先生、私もう3回もした。

でも、ちつともよくならない。失敗ばかりでした。先生きれいな
んですか？」「今より悪うなりやせんよ。」今より悪くならないんだっ
たら、してみようかって言うんで、その手術を十五回もいたしました。
少しずつよくなって、めくれていた左の唇も少しは元に近くなったん
ですけれども、首もくつついておりましたけども、ここも切つてのば
して、ケロイドをとって、足の皮を左の首につけて、まあ少しずつ横
から見て、首にカーブができるようになりました。ここはくつついて
ましたから。少しはよくなっていきました。しかし、元のカーブには
戻りませんでした。私は美しくなりたくて手術したではありません。
ただ、元の姿になりたいだけだったんです。

しかし私は生きています。あの日あの時、逃れるすべもなく、煙に
咽びながら、じりじりと焦がす炎に責められて、苦しみのあまり、水
の中に飲まれて力尽きてこの世を去った人たちの苦しみに比べれば、
私の苦しみなんか物の数じゃないと思います。

この間、文化センターの会議がありました。その時に終わった後、
男の人が私を訪ねて来たんです。「池田さんは妹とおなじ学校、女

学校だったんですね。妹も鶴見町のほうで、学徒動員で建物疎開家屋
の後片付けをしておりました。ひどい火傷をして、大怪我をしておっ
たそうです。父や母がもう毎日毎日町中捜し歩いた。見つからない。
六十二年たってもまだ帰ってこんのです。」そうおっしゃった。そう
したら、その会議に出席されていた女の方が、「私もおっしやった。そう
心に傷がおおきな傷があるのよ。」って。

ヒロシマから、ずつと田舎のほうにはいる芸備線って線ありますね。
山陽本線とか芸備線、田舎の女学校から女学校3年のときに先生に引
率されて、十人の生徒が翌日からヒロシマにいった。救護班で行きま
した。もうね、学徒たちや女学生がいっぱい大怪我してるので、ビル
の壊れた陰でよく耐えられたね、夏ですからまっくろにハエがたかつ
て、蛆虫にまみれ、一日もありや、蛆虫にまみれるんです。それをピ
ンセットでひとつずつ蛆虫をとります。女学生が息絶え絶えに「お姉
さん、お母さんのとこに連れて帰って。お母さんのところ、連れてつ
て。」って、「そうね、待ってね。」そして、隣の人の蛆虫をまた取っ
てあげる。そして、やつとおちついて、帰ってみたら、その人はもう、
息を引き取っていたそうです。恋しい恋しい、お母さんの名前を、お
父さんの名前を呼びながら、末期の水も満足も与えてもらえずに、む
ごいむごい死に方をしていきました。そんな人たちがあまりにも多い
というんでリアカーで、一ヶ所に集めておくんです。トラックが来て
どんだん、物の様に物体のようにどんだんどんだん、積んでいくん
です。その中には小さな手や足がたくさんぶら下がっていたそうです。

それを、今の平和公園の中に幾体も幾体も山積みして、油をかけて焼かれたということなんです。ですから、いろんな公園とか学校の運動場とかいろんなところで毎日毎日人間を焼く煙が上がっていたということなんです。どのだれともわからぬままに焼かれていったわけです。その一人ひとりが肉親にとってはかけがえのない大切な人だったんです。

ここに一枚の写真があります。これはナガサキの写真なんです。ジョー・オダネルさんという人が写した。終戦になって進駐軍が日本上陸してきました。その時、カメラマンとして特派員として、長崎に来たジョー・オダネルという人ですね。この人が写した写真なんですけれども、この子、裸足でぼろぼろの服を着て痩せてますね。お父さん、お母さん、原爆で亡くなりました。この弟の世話を昨日までしてたんです。2歳くらいの弟です。その子がゆうべ亡くなったんです。紐でくくって、焼き場に連れてきました。そして、係りの人が紐を解いて、板の上におかれるわけです。ジュージュージュージュー音を立てて、焼かれていくんです。オダネルさんは「日本の子供は軍国教育ができているからアメリカの子にはこんな真似はできないよ。気をつけ、最敬礼」涙ひとつ見せずに前の方はわかると思うんですけど、悔しさと悲しさと唇から血が出るほどかみしめています。そして、焼かれた灰も誰も持って帰る人がなかったそうです。そして、回れ右、最敬礼して立ち去っていく後ろ姿をみて、オダネルさんは「なにか声をかけてやりたかったって、抱きしめてやりたかったって、でも、そう

したら、この子は崩れてしまうだろう。そう思って、何もできなかった。この子はこれから、どうやって生きていくんだろう？と思うと涙がでる。目がかすんでシャッターを押す手が震えた。」っていう写真なんです。そのオダネルさんが一昨年、おとしです、ナガサキにいらつしゃって、この子に会いたいっていう、八方尽くして探されて、でも亡くなられて、もう会うことはできなかった。

そして、NHKの取材班がアメリカまでずっと同行して行って、というのがあって、帰って原爆写真展を開く。もう杖をつくようなおじいさんになっていらつしゃいました。で、この写真を引き伸ばして、わたしに「子供たちに話して。このことを。」と行って渡してくれた人ですね。この人が、私の1級上だったんです。その人が去年3月に癌でなくなりました。ああ、私ももう時間がないな、私たち被爆者も高齢化しております。私も、夢多い少女だったんですけれど、七十六歳になったわけですね。

あと時間がない。生き、死に絶えるまでに過去の歴史・事実を正確にみんなに伝えておかなければいけない。もし、ヒロシマが風化したら、もつともつとその仕事を受けるかもしれない。そう思うようになったんですね。



もうアメリカに帰って、原爆写真の最後に、安心したよって言葉が入っているんですね。私は、去年ちようど9月にイタリアにまいりまして、ローマの隣のフラスカーティというところに行っただけですけども、そこで、イタリアは何回も、二〇〇五年から、4回くらい行っている、各地でいろんな事を話しているんですけど、9月に帰ってきました。去年の9月ちようど9月8日が、フラスカーティというアメリカの空爆をうけたところなんです、その記念式典に出席して、9月9日に私、ちよつとイタリアの市民栄誉賞を戴いたんですけども。

そして、9月に家に帰りましたら、この京都の宇治市役所の人たちに8月に私、お話ししたんです、ジョー・オダネルさんの話をね、そして、手紙が来てました。

訪問単位に来た子供たちですね、そして、子供たち、オダネルさんのことを書いているんですね。こう、そして、手紙が添えてありました。そして、

「池田さんが話された、オダネルさんが、亡くなられたという新聞報道を見て、おどろきました」って、「それで、わたしたちのせいだから、伝えていかなきゃならないと言う思いを新たにしました、そして、訪問単位のごどもたちにも、反省会で新聞のコピーを配り、オダネル氏の写真が訴えるメッセージをしっかりと受け止め、学んだことを感じた思いをたくさんの人に伝えて行こうと話したところです。」オダネルさんはね、同じ落としたアメリカ人でも、こんなことは許さ

れない。罪もないごどもたち、「巻き添え」になることはよくありませんよ、でもヒロシマ、ナガサキの場合は「巻き添え」じゃなかった。「標的」だったんです。そして、本当にアメリカ人でもそういう風な苦しんで苦しんで六十二年、そして、亡くなられた方もあったわけですね。

ですから、わたしはね、今でも一番胸が締め付けられるのは、あの道端や川岸で手を差し伸べて、断末魔の声をしぼって、助けを求めていた人たちの中に、私の親友やそして、先ほど話した妹さんがいたんじゃないかなと思う時です。六十三年経った今、この瞬間にも原爆後遺症で亡くなっている人があとを絶たないんです。私も、胃がもたれば、癌ではなかるうか？それも、白血病ではなかるうか？そんな思いと恐怖を抱えながら、生きています。

皆さん、ヒロシマに生き残った私たちが、こうした不安、悲しみ、悩み、憤り、平和の願いを抱き続け、訴え続けておりますのに、なぜ、人類は争わなければ、いけないのでしょうか？

絶え間なく、国と国との争いが絶え間なく繰り返されております。そして、戦争は、人間を戦争の前に立たすと、人間は狂気に変わってしまいます。そして、人間が人間を殺すと言う大きな大きな罪を犯してしまいます。生命は人間だけに与えられたものではありません。生きとし生けるあらゆるものに与えられております。

ヒロシマは生命の尊厳を学ぶところであり、その尊厳を奪うのが、戦争であり、テロであり、核兵器なのです。

戦争は自分自身の死につながるばかりではありません。愛する親子、兄弟姉妹、そして友人、そして、鼓動を始めた命までも奪ってしまいます。核戦争には、勝者も敗者もありません。勝ちも負けもないんです。そこに待っているのは紛れもなく地球の終焉で、そして、人類の滅亡で、地球の終わりではないわけですね。

人類が核兵器を根絶させなければ、核兵器が人類を根絶してしまうでしょう。憎しみで憎しみを消し去ることはできません。しかし、憎しみのあるところには絶対には平和はあり得ないんです。

私は、もう二十年前に、東京で、宇都宮とくこ先生、今回いらっしやってる、先生の座談会に呼ばれて、出席致しました。その時にナガサキで被爆されて埼玉に住んでいらっしやた倉茂さんとおっしやる老夫婦が来てらっしやったんです。倉茂さんは、当時、海軍さんで三十七、八歳くらいでしたから、私がお会いしたときにはもう八十歳以上になっていらっしやった老夫婦です。そして、埼玉に住んでいらっしやったんですね。もう、爆心地から百二十メートル、近くに家があったそうです。帰る途中、その日は市役所の配給物資を取りに行つて、帰る途中です。倉茂さんには十二歳一番上、下が四歳その間に六歳と4人のお子さんがいらっしやった。で、もう、家族のことが心配で急いで帰った。そしたら、女の人が爆風で片方の目が飛び出している、石の地藏さんを抱いて、突っ立っている、「奥さん、赤ちゃんでしょう、下ろしてあげなさいよ。」子どもを失って、頭が変になつち

やっているんです。でまたちよつと行くと、木造家屋のぺっしやんこになったそこに、上半身出したおじいさんが「兵隊さん、出してくれ」って、倉茂さんはあの力がどこから出たかわからんけど、とにかく引きずり出した。でも、腰から下がぶらぶらだったっておっしやった。そしたら、倉茂さんの足もって、離さない。「兵隊さん、連れて逃げてくれ！」って。倉茂さん、それどころではない、自分の子供と家族が心配ですからね、固く握った手をほどいて、逃げるようにして、「ここは私の係じゃない、すぐこの地域の係の救護班が来るから待ってなさいよ」逃げるように離れた。そして、振り返ってみたら、瞬きもせず、「兵隊さん、逃げるんかあ」って恨めしそうにらみつけていたんだそうです。倉茂さんは最初から、「年取ってしまったって涙腺がこわれてしまつて、ごめんなさい」と涙ぼろぼろお流しになるんです。「原爆は恐ろしい、人を殺し、傷つけるだけじゃないんです。人間の大切な人間性、魂までを奪い去ってしまう恐ろしい爆弾です。」とおっしやった。あの当時、こんな小さな子どもたちまでが「肩を並べて、兄さんど、今日も学校に行けるのは兵隊さんのおかげです」お国のために、お国のために戦った兵隊さんのお陰です（歌）「こんな子どもたちでも兵隊さんありがとうって歌を歌っているの。「だけど、私はあの老人を見捨てて逃げたんです。」とぼろぼろ泣くんです。そして、ずくつと行ったら、今度は帝国国防婦人会、銀飯ひとつずつ配給なんです。私ね、修学旅行の生徒に子どもたちに「銀飯」って知ってるって聞いたたら、誰も知らないんです。質問してくるのが、「銀

「飯」って何ですかっていう。もう何にも入っていない、のりも巻いてない、白米だけのご飯を「銀飯」、あの当時「銀まんま」と言っていた。固いご飯といえは、もう麦がほとんど、大豆かすとかね、お芋がはいって固くした。あとはほとんど雑炊ですね、味噌汁にメリケン粉、小麦粉を入れたすいとんとか、これが、食糧だったんですけれど、「銀飯」あの米がどこに隠されていたんだろう？って。ひとつずつ配給ですね。お願いします、もうひとつください。やつと2つの「銀飯」を手に入れました。大事にうちに持って帰った。4人の子どもに、母と子に食べさせてやろう、「銀飯」なんて食べさせたこと、久しく食べさせてないから、喜ぶだろうと思った。家に着いたら、家内が生きとったとです。子供の姿が見えない、家内が、「たしか、あの辺で、うちの子かどうかわからないけど子供が遊んでたはずだ」って。よく探すと高い石垣と塀の間に吹けば飛ぶような灰、足の形の灰があったという。爆心地近くでは、灰になってしまいうけですね。あつという間なんです。逃げることもできない、そばへよって、そおつと、その骨を、灰をかき集めてすくい上げたら、足の骨の灰よりもその下の土のほうが重かったとおっしゃった。それを大事にとつて、後に4つのお墓を建ててやったんだ。家内がなんも食べんとです。もう私は苦労したんです。なんか食べると毒だよ毒だよと言っても何も食べん、気を傷めて、何も食べんようになった。で、お子さんの事を聞くと、ポツリポツリとお話になる。子供さんの事を。

六月二十三日、これは沖繩、事実上の終戦ですね。日本で唯一の地

上戦であったわけです。他は空爆だったんですけど、あがって3ヶ月、島民を含めた戦争になりました。時間がないので、あまり大きな事までは話できませんけれど、もししたら、「本土決戦」って言うデマが飛び出したんです。もししたら、一番下の4歳の子が、「おかあちゃん、ナガサキに敵が上陸してきたらなんとするね？」って。「敵が上陸してきたら、敵に殺されるくらいだったら、おかあちゃんがみんな一人ずつ殺して、最後におかあちゃんが死ぬんだからね」って言い聞かせるわけです。これが大和魂だったんです。兵隊さんだって、捕虜になるなら、自決せよって、軍の命令があったぐらいですから。もししたら、その4歳の子どもが「おかあちゃん、殺す順番を僕を一番最後にしてくれ、お兄ちゃんから順番に殺して、僕を一番最後まで残してくれ」ってお願いするって言うんです。たった4歳の子どもがね。

皆さん、「生きる喜び」「平和のありがたさ」って、考えたことありますか？平和ってね、どこかのおじさんが持ってきてくれるわけじゃない、座って待っていれば平和になるんじゃないんです。壊れやすいんです。今、マスクミでも毎日のように殺人事件がありますね。罪も



ない人を切ったり、傷ついたり、親が子供を殺したり、子供が親を殺したり。

あんなにもね、生きたかった、あの日、私さっき言いましたね、学徒が八二〇〇人出た。亡くなった人は、行方不明者を含めて、六三〇〇人なんです。十二歳十三歳十四歳十五歳、何の罪もない武器も持たない子供たちが殺されていったんです。みんな生きたかったんです。

私はそういう報道を聞いたときに、命をなんだと思っっているんだと、本当に悲しくなります。ですから、私はいつも子どもたちにお話する時には、「命は大切にするのよ。どんなことがあっても死ぬんじやないぞ」って。命の尊さ、それを本当に私は、子どもたちに伝えていきます。で、わたしは過去の憎しみを乗り越えて、国境や人種の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと歴史の流れを変えていかなくちやならないと思います。核兵器は人間によって作られたものです。戦争も人間によって起こされていきます。それ故に人間の努力で、愛の心、温かい心、友人愛で人間の英知を集集すれば、核兵器を根絶し得ないことはないと思います。戦争も人間同士が人類愛で、知恵を出し合って話し合えば、きっと防ぐことができると思います。

皆さん、二十一世紀、人類は子孫の繁栄を望まないのでしょうか？子孫の繁栄を望まないどころか、自らの手によって、自らの子孫を滅ぼす鬼畜の類に成り下がったのでしょうか？

いいえ、そうではありません。決してそうではありません。ヒロシ

マ、ナガサキに生き残った者の責任として、命のある限り、自己の利害や苦楽を超越して、戦争反対、核兵器廃絶を、叫び続け、訴え続けて行きます。そのために、私は今、ここに立っているんです。

今日、皆さんの、お集まりになってくださった皆さん、この被爆者の叫びを素直に受け入れてくださる皆さんの力を信じていきます。

私は、もう、世界中いろんなところで話していますが、子どもたちは、「池田さん、戦争はもういやだ、テロもいやだ、核兵器もいやだ」平和を一生懸命求めております。

私はイタリア、おとし十二月十三日、人権と平和の日って言う時、フィレンツェにいったんです。その時、トスカーナ州の中学生高校生八〇〇〇人を集めてくださいました。

話した時に、こんなに長く話ができない、英語とイタリア語の通訳が大変で、三十分も話せない位ですね。それでも子どもたちは話しが終わると立ち上がってばあーっと、で、拍手がやんだの、そして、私のところにみんな駆けつけてきて、「サインしてくれ」って、「今日の話を信じて生きます、このメッセージ信じます。遠くまでよく話しかれてくださいました」って、「私たちはこの話をみんなに伝えていく。大人になったら、戦争のない、核兵器もない、安心して暮らせる平和な世の中のために役立つことをお約束します。目を開かせてくださって、ありがとうございます。」と、子どもたち一生懸命なんです。

この間、今年一月に二十五日から三十一日まで、アメリカに行ってきました。ルイジアナ州に。最後の日に高校5年と午後話したんです。

そしたら、高校2年生の男の子が私のところにやってきて、「アメリカ人として、僕は謝りたい。」と言ってきたんです。「僕は軍人になるつもりだ。頑張って、偉くなつて、絶対変えてみせるよ。」って、約束してくれるんです。

子どもたちみんな、平和のために、もう戦争いやだって、私は、「子どもたちの若い力、二十世紀の負の遺産、戦争の歴史だったわけ、地球的規模の環境問題、温暖化まで。だから、あなた方『二十世紀負の遺産』。罪はないけれど、私たちの代、時代に起きたこの負の遺産を二十一世紀に生きるあなたたち若い方が、後始末していかなければいけないの。その後始末の方法を間違つたら、この二十一世紀はこの地球の最後の世紀になるかもしれない。あなたがた若い力を信じるからお願います。」私は子供たちに言ったんです。

今日も来るとき、ヒロシマの駅で中国の留学生に会ったんです。「あなた方の若い力、信じるからね。」ってお話したんですけども。

ですから、「正しいことには勇気を持っていつづけてください。そして、間違つたことには、はっきりと“NO”といってください。平和の原点は、平和のもとは、人間の痛みがわかる心を持つことです。人の痛みがわかる子どもは、いじめや差別できないでしょ。」って子どもたちに言う。「戦争もできないはずよ」って。力はたとえ乏しくても、たとえ一人ずつでも私たちの願いに共鳴してくださる人々を増やしていつて、世界中の人たちの力強い平和のスクラムが組まれる日が近づくことを、願い祈りながら、いつ襲い掛かっているかもしれない

い原爆の後遺症との闘いの場を糧としておるのでございます。

少し、時間が超過しましたが、話しても話しても話しきれないほど、たくさんお話があるんですけれども、時間もちよつと超過してまいりましたので。

ご静聴、ありがとうございました。